

かめづか
亀塚遺跡 (本発掘調査B)

所在地 安城市桜井町地内
 (北緯34度55分16秒 東経137度05分56秒)

調査理由 中小河川改良事業(一級鹿乗川)

調査期間 令和5年6月～令和6年2月

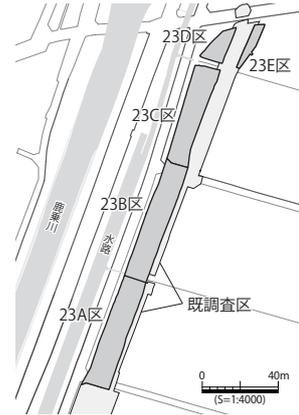
調査面積 2,605㎡

担当者 堀木真美子・河嶋優輝・池本正明



調査地点(1/2.5万「安城」)

調査の経過 調査は愛知県建設局河川課による中小河川改良事業(一級鹿乗川)に伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。本遺跡では1970年代に安城市による発掘調査が行われたほか、平成28年度以降、愛知県埋蔵文化財センターが断続的に本発掘調査Bを実施しており、今年度で5度目となる。今年度は、大橋南東から2016年度調査区の北端まで、現市道部の東に隣接する帯状の範囲を主に調査した。調査区は南から23A～23E区に区分し、23A区はAa～Ac区、23B区はBa～Bc区、23C区はCa・Cb区に細分した。調査面積は計2,775㎡である。

23年度調査区配置図
S=1/4000

立地と環境 遺跡は碧海台地東縁部から沖積地に広がる鹿乗川流域遺跡群の一部であり、遺跡群の北群の南端部に位置する。

調査の概要
 23A区 23A区では、南部で東西方向の旧流路00003NRを確認した。これは東に隣接する19区や西方で実施された安城市第一次調査でも確認されていたもので、深さは1m以上、幅は約15mを測る。弥生時代後期から古墳時代前期の遺物を多量に包含する。出土遺物は土器、木製品があり、土器には甕、壺、高坏、器台、鉢、浅鉢、ミニチュア土器、土玉、手焙型土器がある。木製品には杭、又鋸、掘立柱建物部材、竪杵、竪櫛などがあり、流路の南側斜面では杭列も確認された。

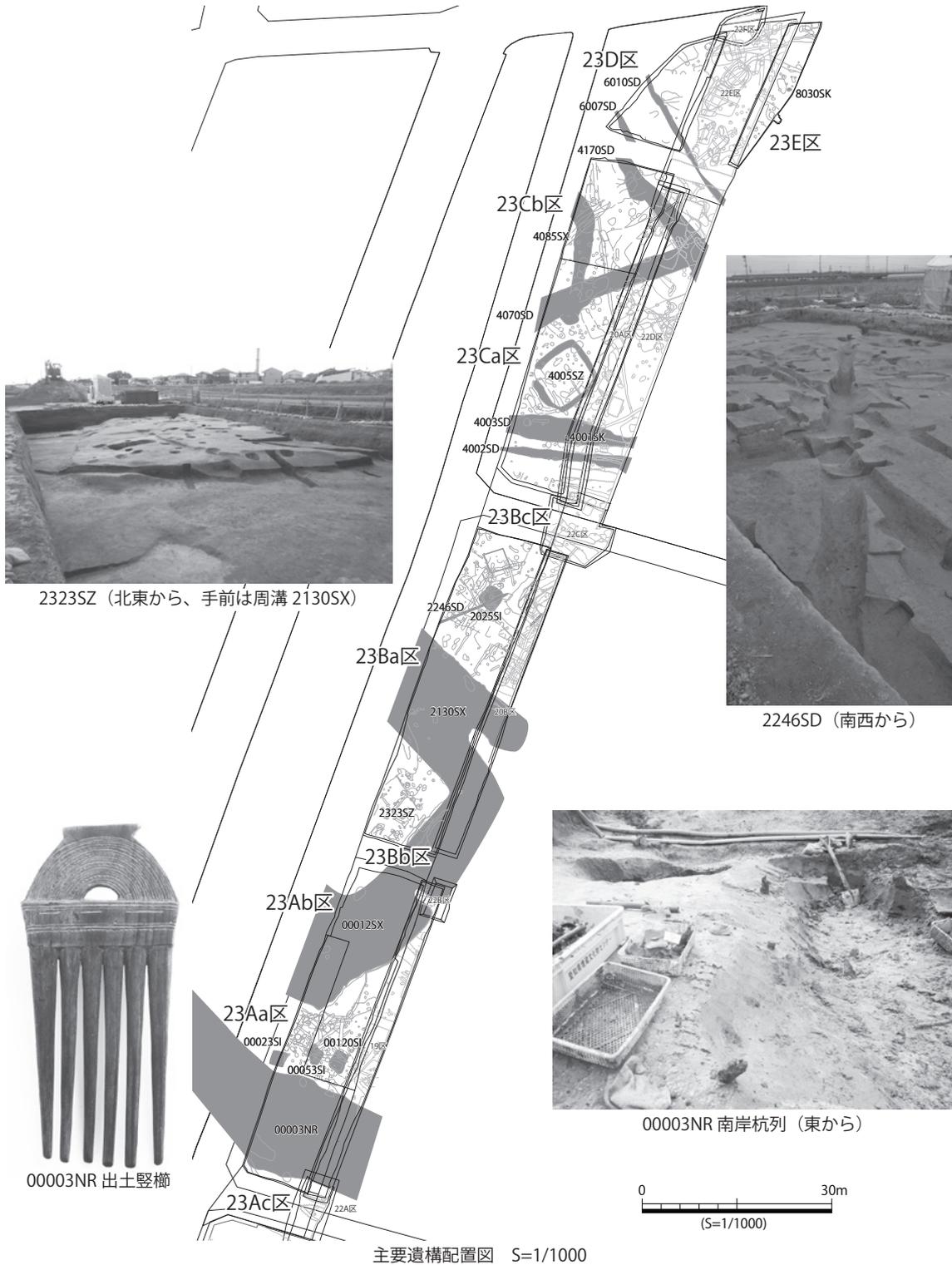
00003NRの北側、23A区中央部では竪穴状遺構3基および無数の土坑、溝を検出した。出土遺物は弥生時代末期から古墳時代初頭を中心とし、古墳時代前期の遺物は00003NRの北岸より北では確認されていない。竪穴状遺構では明瞭な柱穴が確認できなかったため、住居とは断定できないが、生活空間であったものと推定される。

竪櫛 00003NR出土竪櫛は長さ約109mm、幅約50mm、厚さ約6mmで、板材から削り出したものである。ムネ部の一端が欠ける以外は完存する。ムネ部の線刻は、歯を束ねて製作する結歯式竪櫛を模したものであり、線刻部や凹部には赤色顔料が遺存する。顔料は蛍光X線分析により水銀朱であることが確認されている。

23B区 23B区の北側では23A区中央部と同様に竪穴状遺構と土坑、溝が展開するほか、掘立柱建物跡も確認される。23A区同様に竪穴状遺構では柱穴を確認できなかった。出土遺物は弥生時代後期から古墳時代初頭が中心であるが、23A区と比べて弥生時代後期に属すると思われるものが多く、弥生時代中期に遡る遺物がまとまって出土する遺構が数基(2246SD等)存在する。

大型方形周溝墓 23A区北側から23B区南側にかけては、00012SX(23A区側)、2130SX(23B区側)と呼称

する溝状の遺構があり、23A区で外側、23B区で内側の屈曲部が確認され、コの字状を呈する。中央には基盤層を掘り残した高まりがあり、その上部には盛土層らしきものも認められる。23A区側は攪乱により明確でないものの、大溝を周溝、中央部の高まりを墳丘部と考え、方形周溝墓2323SZと呼称する。規模は周溝幅が北東側約13.3m、南西側約12.0m、南東側約9.9m、墳丘の北東-南西軸の想定長が約31.5mで、周溝の両端間長が約56.8mとなる。帰属時期は周溝出土遺物から弥生時代後期～終末期と推定される。(河嶋優輝)



2 3 C 区 23C区は、北側で幅6.0m以上の4070SD、北東隅では幅5.0mとなる4120SDが検出された。これらの溝は、23C区の東側に位置する。いずれも埋土中からは12世紀代の山茶碗類が散見できるが、これに前後する土器類も出土しており、帰属時期は若干の検討を要する。

4070SDと重複する4085SXは、幅2m程度の溝状の遺構だが、南端部は不整形となっている。埋土中からは弥生時代中期後葉の土器類がややまとまって出土している。

中央部では方形周溝墓4005SZが検出された。規模は一辺約7.0～7.5m程度で、主軸は45度程度東西に偏する。南東部には幅約1.0m程度の陸橋部を有する。北東溝と南西溝のほぼ中央からほぼ全形を残す弥生時代後期の高杯が出土している。

南側では中世以降となる4003SDと4002SDが、主軸を東西方向に向けて、ほぼ並行して展開する。なお、前者の基底部から検出された4001SKからは、遠賀川系土器の壺の大型破片も出土している。

2 3 D 区 23D区は、C区で確認された4120SDに連続すると思われる6007SDを、南西隅で検出している。埋土や出土遺物は4120SDと類似する。

中央には大規模なドーナツ状の攪乱が存在する。平成10年度に埋文センターが実施した、鉄塔の移設に先立つ発掘調査に関連する旧鉄塔の撤去痕と思われる。遺構検出面が残存する中央部分では、6007SDと主軸が一致する幅0.8m程度の6010SDを確認するが、出土遺物も乏しく詳細は不明となる。なお、22D区と22E区からは6010SDに連続すると思われる溝が検出されている。

2 3 E 区 23E区は、22E区、22F区の西側となる細長い調査区となる。中央部から検出された8030SKは、長径0.7m、短径0.5mの楕円形の土坑で、弥生時代中期後葉の太頸壺が埋設されており、土器棺墓と考えられる。太頸壺は焼成後穿孔による円窓付土器が使用され、穿孔部を上面とし、斜め方向に埋設されていた。口縁部と穿孔部には別個体の土器底部片を被せて蓋としている。なお、市道を挟んだ23E区の北側は中狭間遺跡となり、市道を挟んだ北側が22A区、その西側は23A区となるが、8030SKと近接する位置からはほぼ同時期の土器棺墓が22A区で1基、23A区で4基検出されている。このエリアには中期後葉の土器棺墓により構成される墓域が展開していた可能性も考えられる。

(池本正明)



調査区遠景 東から



23A 区 00003NR 中層の自然木堆積状況 (西から)



23Ba 区全景（上が西北西）



23Cb 区全景（南から）



23Cb 区 4050SZ（南から）



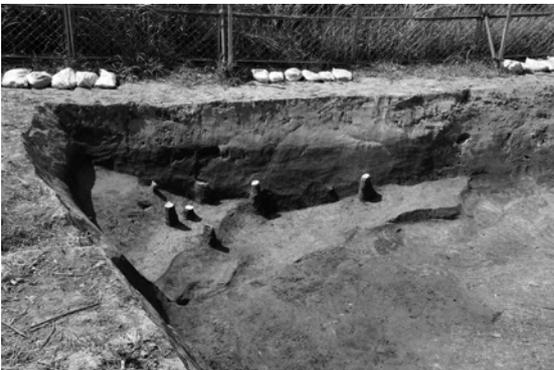
23Cb 区 4050SZ 出土状況 1（北から）



23Cb 区 4050SZ 出土状況 2（南から）



23E 区 8003SK 上面（南から）



23D 区 6007SD（東から）



23E 区 8003SK 下面（南から）